

金蓮寺蔵 浄阿上人絵伝について

「絵巻」という形式の有効性が強く意識されているところに特色がある。

ところで「淨阿上人絵伝」は、時宗四条派の祖淨阿真觀（一二六九—一三四^{注1}）の生涯を描いたもので、絵巻として必ずしも上作とは言い難いが、時宗の祖師絵伝のもつ前述の派閥意識がよく現われており、また数少ない淨阿伝の一つでもあるので、全巻を掲出し、詞書を翻刻して紹介することにした。^{注2}

この絵伝は、四条派の本寺四条道場錦綾山金蓮寺^{注3}の所蔵で、三巻から成り、現在後補の桐箱^{注4}に収められる。巻上は詞絵各二段、巻中は各三段、巻下は各五段から成り（法量別表参照）、各段の構成は、

巻上

第一段 総序、淨阿の出生、幼時より無常を感じること。絵は、淨阿の生家、幼き日の淨阿が、飛花落葉を見て無常を感じるところ（原色図版3）。

第二段 永仁元年（一二九三）の出家、諸国修行の後鎌倉に至り、極楽寺忍性のもとで律を学ぶこと。絵は、剃髪出家、諸国修行及び極楽寺忍性の室の三場面。

巻中

第一段 極楽寺を去り再び諸国修行、紀州由良へ至り、心地の門下に入り禪を学ぶこと、さらに心地の指示で熊野へ参詣すること。絵は、由良の寺院と港、及び熊野の社殿。

第二段 熊野新宮での神託、念佛形木を賦与され、一阿と号し念佛行者となること。絵は、熊野新宮の境内。

第三段 越中国野尻での念佛勧進の時、日蓮宗徒により池に投ぜられるも、池中より光を発し、土地の波多野氏に救われること。

時宗の開祖たる一遍上人の絵伝は、一遍の俗甥で六条派の祖となつた聖戒が、正安元年（一二九九）に撰述した「一遍聖絵」（以下「聖戒本」と称す）と、他阿真教の弟子宗俊が徳治二年（一三〇七）以前に撰述した「遊行上人絵」（以下「宗俊本」と称す）の二系統に包含される。これは、時宗祖師絵伝のもつ大きな特色で、その成立と流布の事情について一つの示唆を与える。聖戒本は、一遍の生涯の足跡を刻明に追い、それを再現するところに特色があり、祖師絵伝通有の誇張や神聖化は殆ど見られない。ところが、宗俊本は全十巻のうち、後半六巻を他阿真教の伝にあて、同時に時宗における他阿真教の正統性を特筆するところに特色がある。聖戒本の成立は、その意図に関らず、真教を祖とする遊行派にとって一つの脅威であり、一遍の繼承者は聖戒ではなく真教であることを明言する必要に迫られて宗俊本は撰述されたのである。そして聖戒本の流布の範囲が限られるのに対し、宗俊本が広く流布していることは、その後の遊行派の拡大を示すものであり、また宗俊本を転写することが、遊行派の正統性を継承する意味を持っていたことを示している。時宗の祖師絵伝はこのように派閥意識が顕著であり、また逆に宗派の宣揚のために

絵は、池中の淨阿が光を発するところ及び淨阿への帰依のようす。

卷下

第一段 諸国を遊行し、延慶二年(一二〇九)上洛し教化すること。

絵は、洛中の賑い。

第二段 四条祇陀林寺に入り諸人の結縁を得ること。絵は、祇陀林寺での教化。

第三段 河端女院(広義門院)の難産に賦算して効験があり、四条京極に一字を建立、錦綾山太平興國金蓮寺の号を賜わること、また上人号を賜わること。絵は、宮中及び勅使の召に応じ院参する淨阿。

第四段 河端女院の帰依。絵は、女院と淨阿の問答。

第五段 女院、公家の帰依及び結語。絵は、淨阿の室を訪れる公家。

となつてゐる。

この三巻の絵伝について、寺伝では絵を土佐光信筆、詞は尊応法親王の筆^{井5}といふ。しかし、絵について見ると、巻上・中の二巻は室町時代後期のものであるが、巻下は江戸時代の補作である。そして詞は上二巻と同期の作と見られる。こうした構成となつた経緯は不明であり、またそれらの筆者について伝承が正しいかどうかを俄に断することはできない。

ところで、この絵伝に記される淨阿の伝は他の淨阿伝と比較して二、三注目すべき点が見られる。すなわち、淨阿が念佛行者となつたのが熊野新宮の神託に基づくもので、形木名号を熊野新宮より授けられたとして、淨阿を一遍に擬せんとしていること、そしてその

ために他阿真教との関係について触れないことである。『続群書類從』第九所収の「淨阿上人行状」には、

(前略) 正安二庚子年十一月廿三日。到武州^{野或上}板鼻。見他阿弥陀佛。念佛安心。問答決^三日。終師事他阿。此時改一阿号淨阿。相承法脈。與師往相州當麻焉。(後略)

とあり、正安二年(一二〇〇)に、板鼻で他阿真教に師事し淨阿と号したことが知られる。さらに形木名号についても「行状」は、延慶二年(一二〇九)閏六月十九日に他阿より相承したことを記し、この直前に河端女院に授与したのは一遍が熊野權現より授かつた札を模したものと記している。この形木賦与のことは七条道場金光寺文書によつても明らかである。

絵伝におけるこうした作為は、その成立事情の特殊性を示唆している。結論的に言つて、淨阿絵伝は、四条道場が他阿の遊行派に対する抗して、その宗派としての独自性を主張するために撰述されたものと推定される。京都において、四条派は皇室や公家と強く結びつき、遊行派とは性格に異にしていたが、遊行派の七条道場と必ずしも対立的な関係にはなかつた。金蓮寺に宗俊本系の遊行上人絵伝が二種伝存することからもそれは明らかである。ところが応永年中(一三九四—一四二八)に、教団として強い力を持つた遊行派は、四条道場を七条道場の末寺化しようとしたことに端を発し、四条と七条との間で対立がひきおこされ、四条派による道場の破却にまで發展している。こうした経過の中で、四条派はその独自性、正統性を主張するため淨阿上人絵伝を撰述し、そこにおいて他阿の上人号が淨阿の奏請によることを記すほかは、淨阿改号の事實を犠牲にして、他阿との関係を抹消したのであろう。そこにはかつて聖戒本に

対抗して宗俊本が撰述された時のように、派閥意識が強くあらわれているのである。

(若杉準治)

〔注〕

- 1 浄阿の生年について、絵伝は建治元年（一二七五）出生、永仁元年（一二九三）十九歳出家とするが、ここでは「行状」の暦応四年（一三四一）七十三歳で入寂という記述に従つて表示した。
- 2 この浄阿上人絵伝は、かつて有賀祥隆氏によって紹介されたことがあり（四条道場（金蓮寺）歴代浄阿上人像と開山浄阿上人絵詞伝について『藤沢市史研究』第九号昭和五十一年）本稿はそれによるところが大きい。
- 3 京都市北区鷺峰藤林町一の四。昭和五年（一九三〇）まで、同中京区新京極通四条上る中之町にあり、四条道場及び四条派の名はこれに由来する。なお、旧地には塔頭染殿院が残っている。
- 4 蓋表に「青蓮院法親王尊應御筆／開山浄阿上人絵詞伝／金蓮寺」と墨書する。
- 5 尊應法親王は系図にはあらわれない。おそらく二条持基の子で准三后に叙せられた青蓮院の尊應（永正十一年・一五一四入寂）のことであろう。
- 6 現在群馬県（上野国）安中市にある板鼻であろう。

浄阿上人絵伝法量表 (縦各33.5) 単位 cm

	卷 上	卷 中	卷 下
表見本			
紙	29.4	29.4	28.9
返	29.4	28.9	28.4
1	53.0 詞 I	53.4 詞 I	49.1 詞 I
2	53.9 ハ	53.2 ハ	35.7 ハ
3	54.0 ハ	53.9 絵 I	49.1 絵 I
4	42.1 ハ	53.9 ハ	49.7 ハ
5	53.0 絵 I	53.9 ハ	44.4 詞 II
6	53.6 ハ	54.0 ハ	49.4 ハ
7	52.5 ハ	54.0 ハ	28.9 ハ
8	53.5 ハ	53.9 ハ	49.7 絵 II
9	53.5 詞 II	53.9 詞 II	49.9 ハ
10	54.0 ハ	28.6 ハ	49.1 詞 III
11	32.4 ハ	53.5 絵 II	49.7 ハ
12	54.4 絵 II	53.9 ハ	27.1 ハ
13	53.8 ハ	53.7 ハ	48.5 絵 III
14	53.8 ハ	53.5 詞 III	48.9 ハ
15	53.7 ハ	31.9 ハ	47.9 詞 IV
16	53.6 ハ	53.7 絵 III	49.4 ハ
17	53.9 ハ	53.6 ハ	33.4 ハ
18	53.7 ハ	53.6 ハ	48.1 絵 IV
19	53.7 ハ	53.5 ハ	47.7 ハ
20			49.4 詞 V
21			48.9 ハ
22			47.5 絵 V
23			48.3 ハ
軸付紙	34.6	35.7	30.1
本紙計 (全長)	986.1 (1,050.1)	973.6 (1,038.2)	1,049.8 (1,108.3)

上
卷

（外題）
上

（第一紙）

夫惟衆生元來無生死法性
寂然故経曰始知衆生本來成
仏生死涅槃猶如昨夢といへり

然に自性清浄の躰の上に元品
無明より縁起して仮に生死の
道に出たり譬は本来一水なりと
いへとも風の縁によりて浪となるか
ことし八九の種々識水中のもろく
の波のことく無明煩惱の縁により
て生死の浪をたつ但心性不動の
本識に躰達しぬれは生死の

（第二紙）

波しつかなり其躰本より清浄不
動にして迷悟の差別なし凡聖
等同なり故流浪三界内癡愛
入胎獄生已帰老死沈没於苦
海我今修此福廻生安樂国とい
へりいふこころは我等久生死に
しつみ福智の珍財を失へり安
養は涅槃界迷悟ともに往生して
快樂不退の國土也今適仏教
にあへり何修行せさらむや而に
一代半滿の教を窺ふに過半

—(第三紙)

上機に約するか故に末代の
根機にかなひかたし爰當寺
開山淨阿弥陀仏は上総國の
住人牧野太郎源頼氏の子也
建治元年に誕生して春秋七
歳の春飛花落葉を觀して
世の非常をさとり世篇に心をとめ
す明し暮し給ふほとにつなかぬ
月日うつりやすく電光朝露
とゝめかたきかゆへにおもはす歳
ふけにけり既に十七八もなり

—(第四紙)

しかはいよ／＼四季折節の転変
をおもひ八苦充滿の境界をつ
らむるほどに変幻の穢土の
身を捨て仏果円満の身を
得んとおもへり

—(第五紙)
絵 第一段

—(第六紙)

—(第七紙)

—(第九紙)
詞 第二段

同國丹生山円通寺にして
果して十九歳永仁元年に
父母親類にもかくれて遁世し
て諸宗の修行を闇といへども
機あさくして難得故に山林樹
下に心を凝し難行苦行すれ
とも得ざる間諸国を修行する程に
鎌倉の極樂寺長老良觀に值
奉り律法を学する事既六年也

—(第八紙)

凡比丘は二百五十戒なり略頌云四重
四提二不定十三僧残七滅諍
三十捨墮為六聚九十單墮百

—(第十紙)

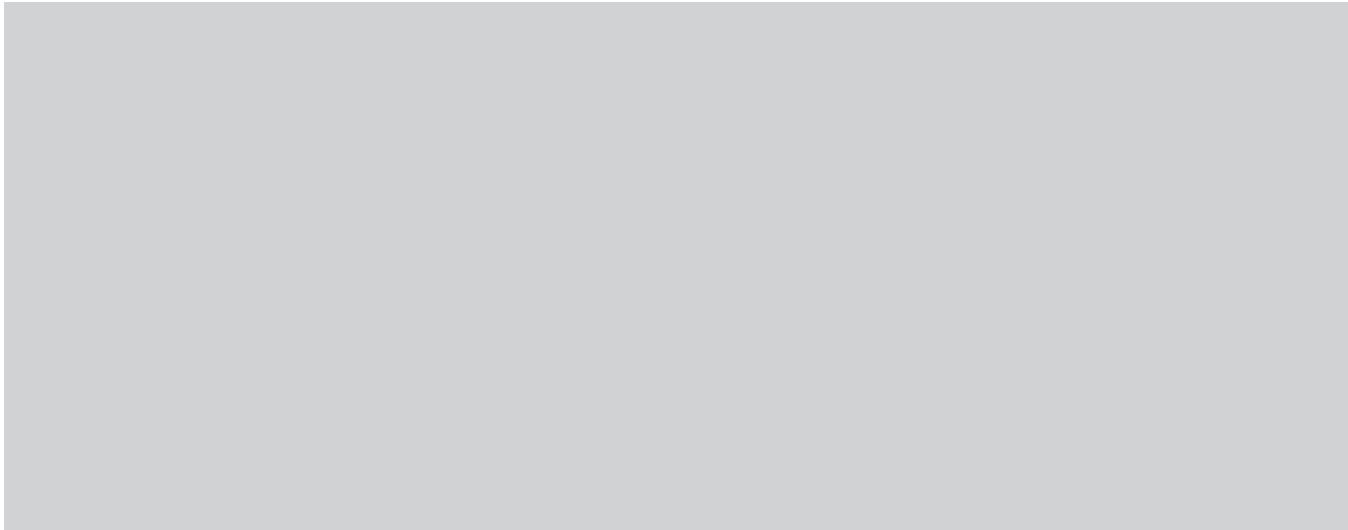
衆學文比丘尼は三百四十八戒なり
或は五百戒と云は異説なり四重といふ
は又四波羅夷と云此には無余といふ又
不共住と云一には大姪戒若犯すれば
断頭といふ二には大盜戒若犯すれば
斷多羅樹心と云三には大殺戒もし
犯すれば針缺といふ四には大妄語戒
若犯すれば石裂といふ各一義なり
此等の戒法一代金口の説相なりと
いへとも瓦石の本来作業なけれは
未来も亦然ならむかことし未断惑
の凡夫出離しかたしと意得て
極樂寺を立さりぬる時よみ給ふ

—(第十一紙)

いにしへのくるしき事を忘るゝは
又ゆくすゑもかなしかるへし

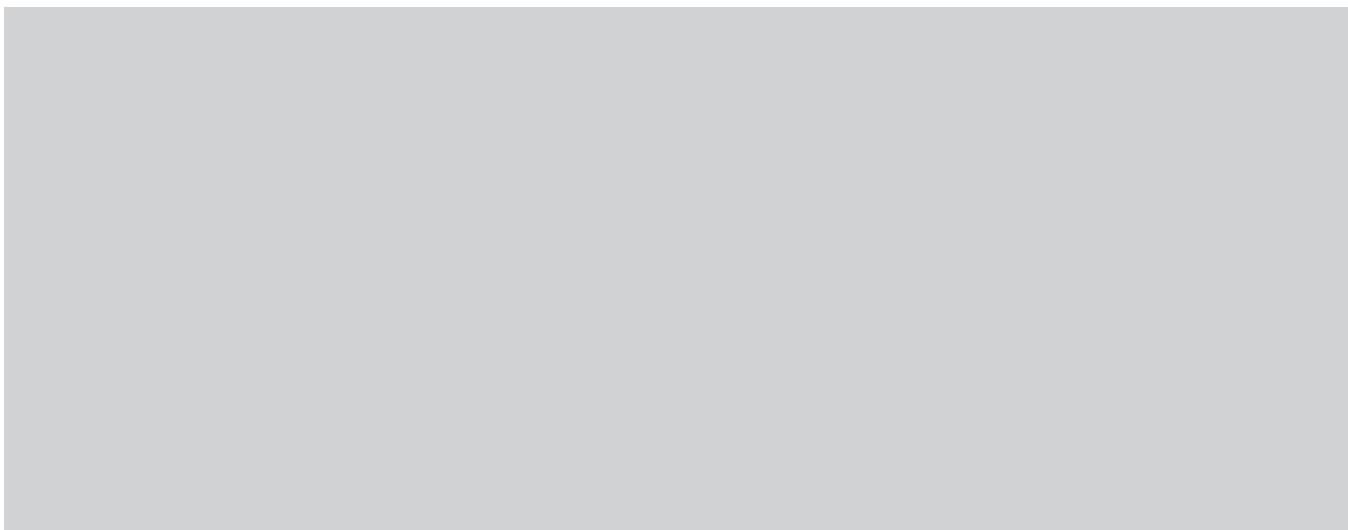
—(第十二紙)
絵 第二段

—(第十三紙)

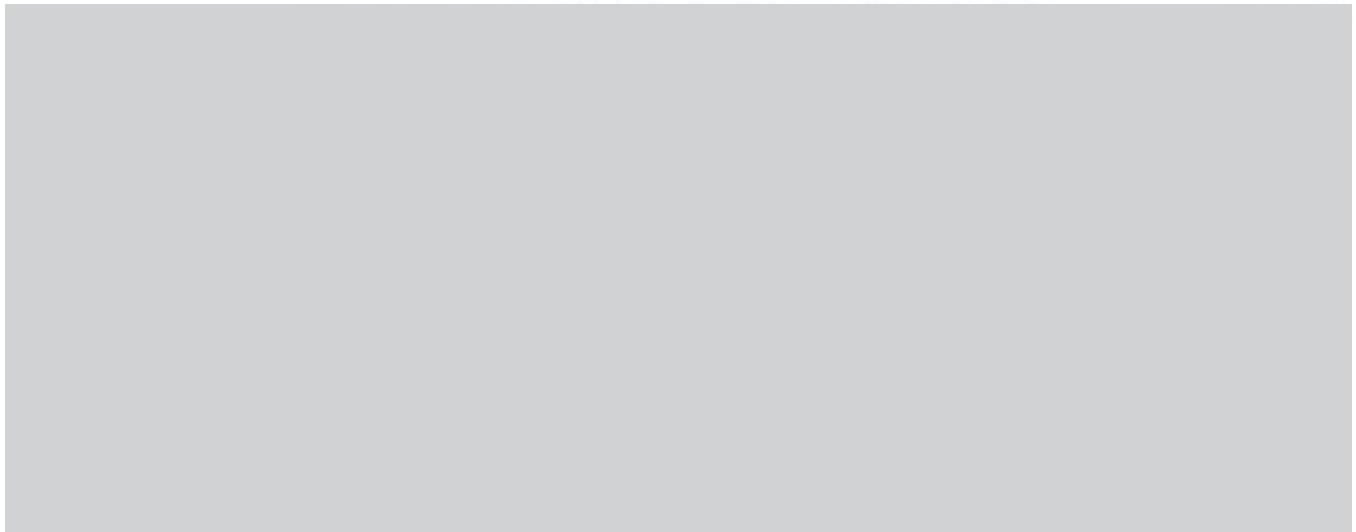


—(第十五紙)

—(第十四紙)

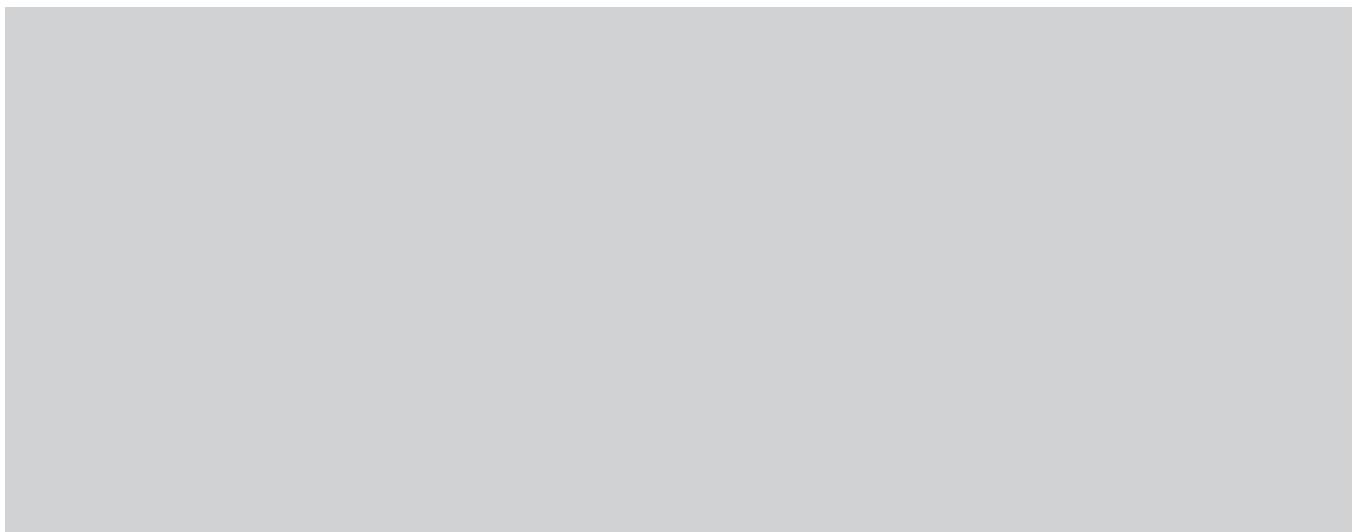


—(第十六紙)



—(第十八紙)

—(第十七紙)



—(第十九紙)

—(第一紙)
詞 第一段

又諸國を修行するほどに或時
には山岳の峨々たる嶮岨を
こえて朝雲の風の前になひき
やすきをなからめて身をあたし
世にをかしとおもひ或時には
海潮の碧々たる孤嶋を過て
暮靄の雨の後に見たりかはる
をわかつて心をあらきめにみ
ましとなげきけるほどに紀州
由良に至て心地上人にまみえて
則座下にて禪法を同事
六年すといへとも猶以不得
或時心地に向て云多年工夫

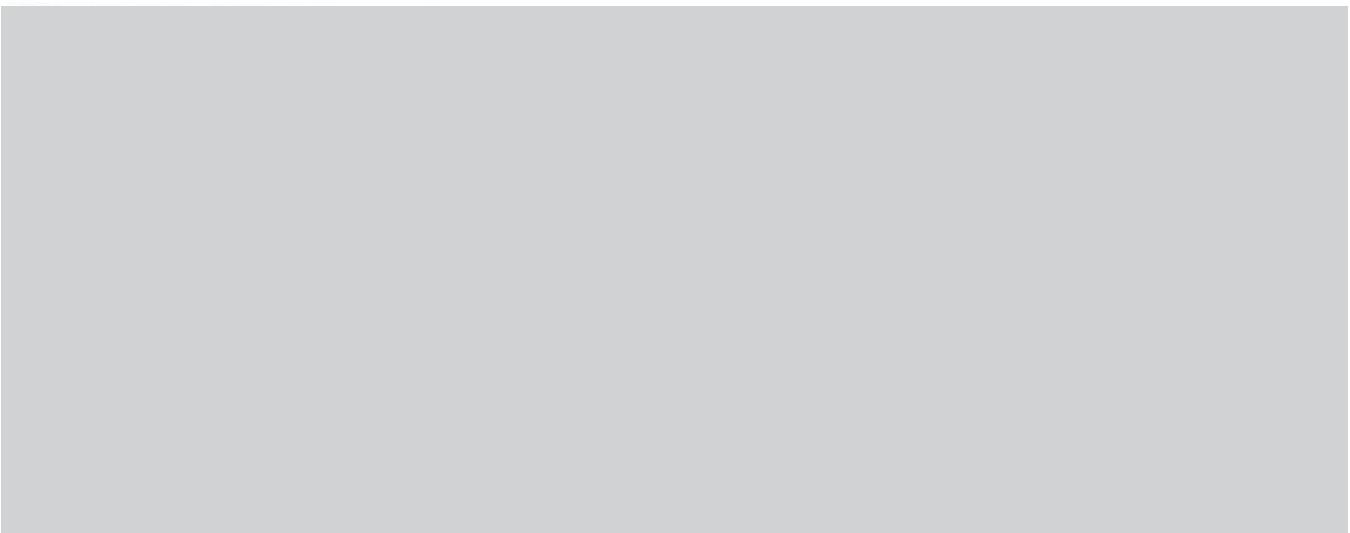
—(第二紙)

すといへともいまた一分鼻孔を
不得然而尚以修行すへきや否
示給へき旨ありや否爾時心地
曰多年の工夫に不得は性に
よるへからす佛法は又教外
別伝にして文字言説の相を
離たり口説に宣へからず但
熊野に參詣して祈禱すへき
と云々則熊野に參詣す

—(第三紙)

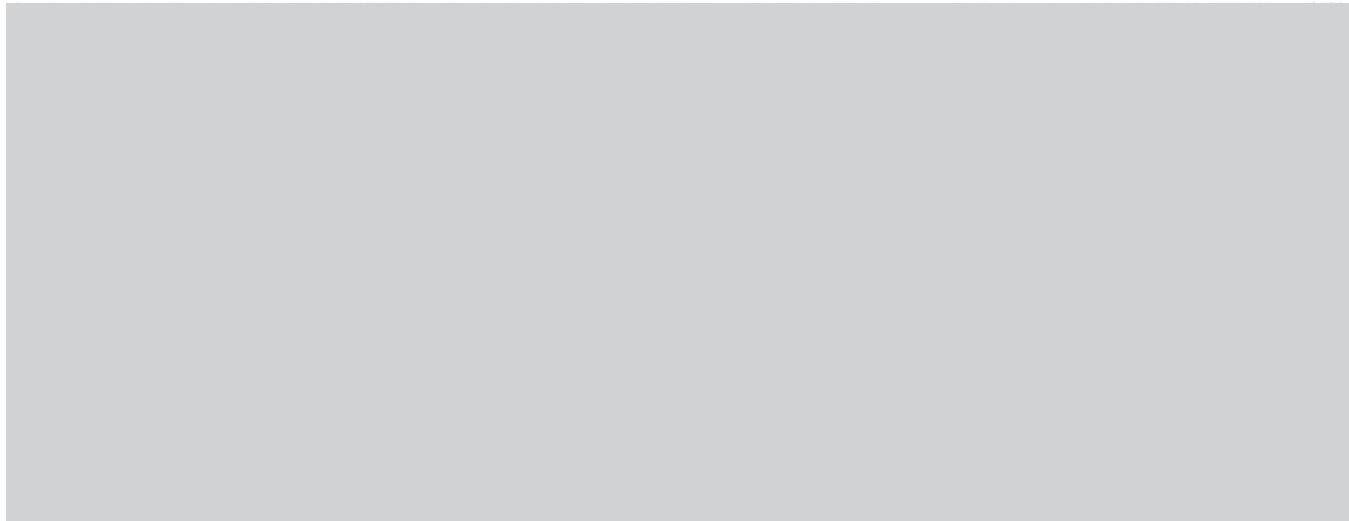
絵第一段

—(第四紙)

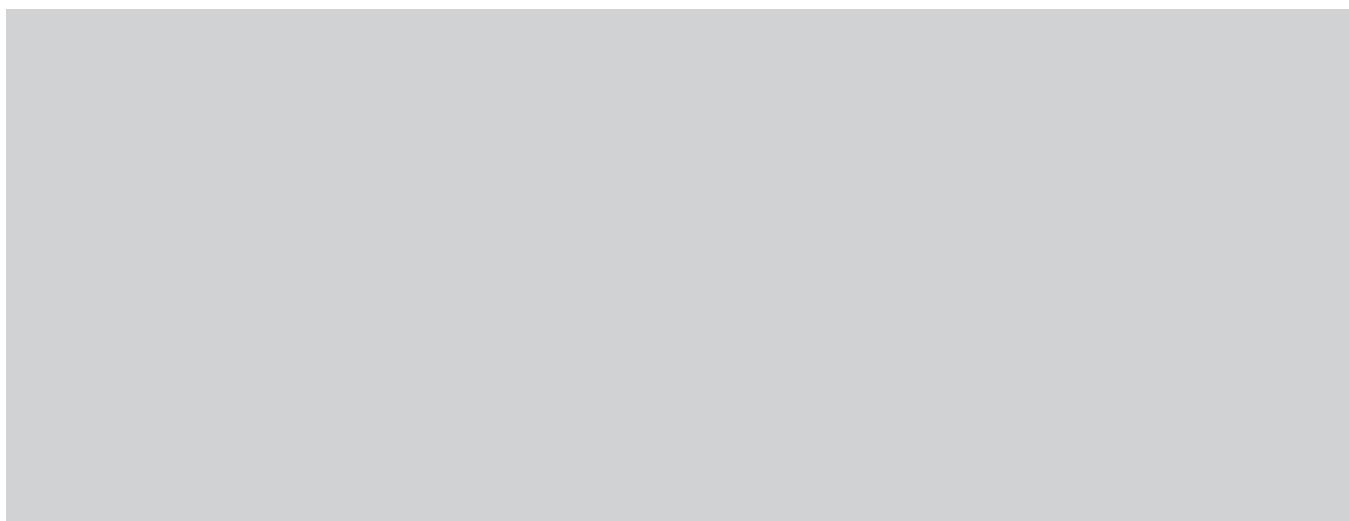


—(第五紙)

—(第六紙)



—(第七紙)



—(第八紙)

—(第九紙)
詞
第二段

翌日に新宮に参詣する白雲
嶺峯の巖を上下とし青碧
瑠璃の水を凌つゝ同日に

参着す通夜の瑞夢あり示て
曰造惡の凡夫念佛往生に帰
せすより外は出離すべからず

此札を賦て衆生を利益すべし
とて念佛の形本を給て名
をは一阿弥陀仏と号すべし
と云神託に預て則今度の
出離をおもひさためて余行を
さし置て一向專修の念佛の
行者となりて昼夜懈事なく
して諸国を修行し念佛を

—(第十紙)

勸進して村さとを残す事なく
めぐり給ふ

—(第十一紙)

絵 第二段

—(第十二紙)

—(第十三紙)

申折節に下輩下行の讚を
いたし給ける淵の底より光
明赫奕たる砌其領主なる野
尻是をみて日連の輩を追払
て淵より取上奉る其時日連の
輩帰伏して則念佛宗となる
國中の法花堂皆以如此彼野尻
といふは頭人波多野是也又彼
日連の輩帰伏のあまりに本尊

—(第十五紙)

別に造へからすとて淨阿彌陀
仏の御影を本尊と安置する
在所在之

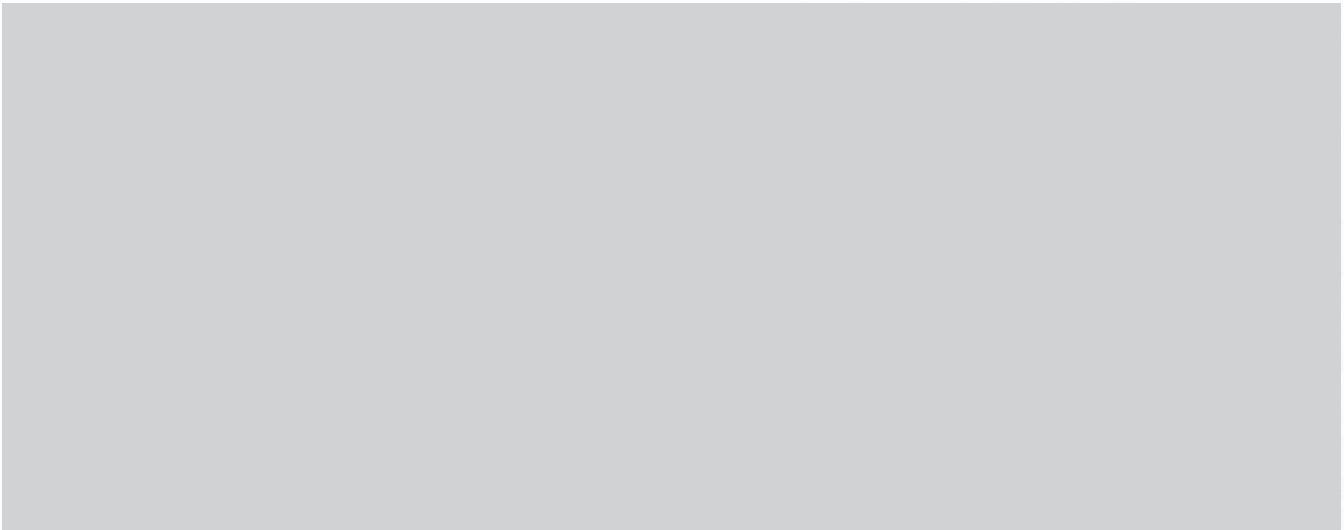
—(第十六紙)

詞 第三段
或時越中國にして念佛勸進
し給ふとき野尻と云所にて
日連の輩ありて大乗誹謗の
者也とてとうへて淵にしつめ

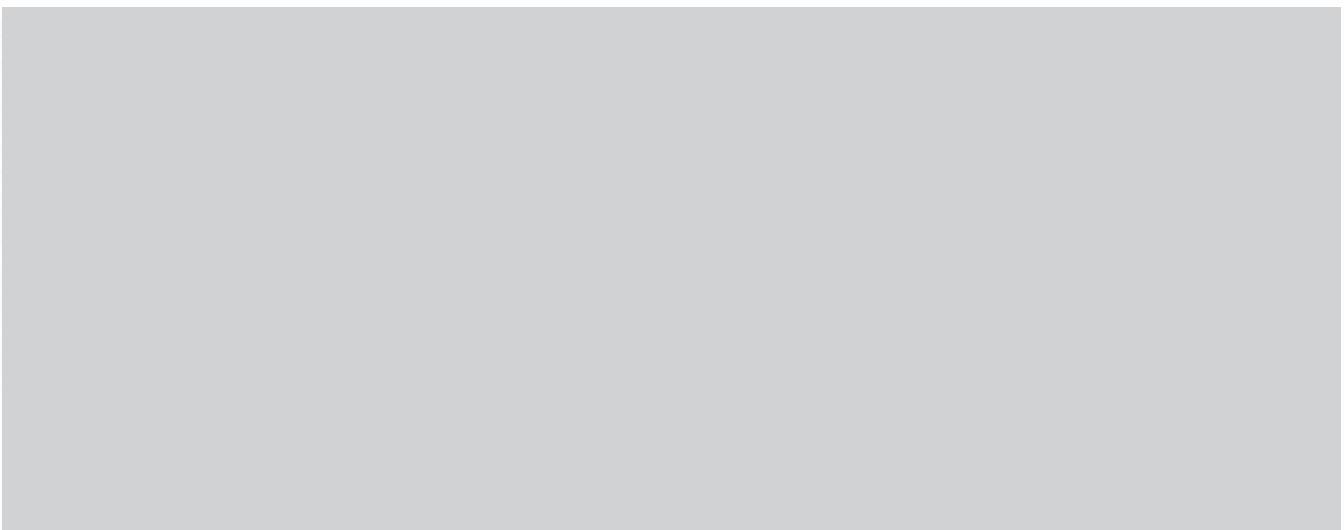
—(第十四紙)

詞 第三段

或時越中國にして念佛勸進
し給ふとき野尻と云所にて
日連の輩ありて大乗誹謗の
者也とてとうへて淵にしつめ



—
（第十七紙）



—
（第十九紙）

—
（第十八紙）

—(第一紙)
詞 第一段

同年の秋の比越中の國を
立て邊境辺土のへたてなく
時處諸縁をきらはす修行
し給て善人に算を与ては
其善を增長せしめ悪人に
念佛を授てははやく善人に
翻し上下万民老若男女智
識の勤化に相たてまつらす
と云事なしかくて次第に
修行日を重て延慶二年の

—(第二紙)

春の比洛陽に趣四条五條の
市中にして機に隨ひ縁に
ふれて念佛勸進し給ふ
ほとに普衆生聖の教化に
あひ心さしを一致にして称名念佛
しけり誠に空也上人の市中
是道場と宣給ふを思合て
難有こそ覚え侍り

—(第三紙)

詞 第二段

四条朱雀紙陀林寺は往昔
一条院の御宇長保年中に
仁康上人開基の靈場なり
暫爰に逗留し念佛勸進し
給ふ凡一代の説經八万四千に
わかるといへとも何も智門を
ひらき発心の上に益を施せり
今聖のすゝめを智を捨て
分別をなさしむる事なく
且称名を信して貴賤を

—(第六紙)

撰す利託をいはす老少男女
平に信し平に唱ふれば必一念
の上に往生の業成就して
終焉の夕には三尊来迎に
預て九品の台に至んとのみ
勧給ふ機教相応し衆人
こそつて此勸化を専とし
万機もるゝ事なく往生素懷

—(第四紙)

をとけしむ誠哉此聖は弥陀
の変化末世相應の導師なりと
洛陽中帰依の尊卑頂をかた
ふけすと云事なし貴賤
參詣雨のふるかことし花の

一(第七紙)

ふる朝もあり紫雲のたつ
夕もあり瑞相一にあらず諸
人奇特のおもひをなし結縁
值遇の道俗遠近親疎の
往詣馬に蘇鉢車に油さし
追日群集し侍り

一(第八紙)

絵 第二段

一(第九紙)

一(第十紙)

詞 第三段

爰介人王九十二代後伏見院の
后河端女院骨広義 難産の患有
諸寺諸山に勅して是を祈ると
いへともしるしなし或夜帝の
靈夢にひんづら結たる童子
二人来て曰女院難産の事祇陀

懇奏に依て上人に任し給へり

林寺にあんなる諸国修行の
念佛勸進の聖の札をめし

給ふへし吾は則熊野權現也と

告て虚空にあかり給へり

翌日三条の大外記師宗に宣下

—(第十一紙)

有て勅使日野柳原大納言殿を
もつて院宣數度に及殊に綱代の
輿を給はるの間聖乘興して
院參し小字の弥陀号三枚
まいらせらるゝ女院此札をきこ
しめしてほとなく太子誕生有
公卿をのく耳目をおとろかし
太子を取上見奉れは三枚の
札を左の掌に握て誕生し給ふ
九十六代帝光嚴院是也諸卿
奇異のおもひをなし聖を尊崇
まします帝御感有て聖の
廻國を留め四条京極に一字の

—(第十三紙)
絵 第三段

—(第十二紙)

伽藍を建立有元年長錦綾山太平
興國金蓮寺の額は萩原天皇
号花園院
震翰を染くたし
給ひぬ聖は上人の院宣を蒙り
おなしく他阿弥陀仏も聖の

—(第十四紙)

一(第十五紙)

詞 第四段

河端女院偏に上下の勧化に
帰伏ましくて当院に行啓
あつて上人に結縁有或時は
手つから麻苧をよつて法衣と
なして上人にまいらせ或時は上人
の法衣を乞是を着して
専一行三昧の念佛を唱て
菩提を祈り給ひぬ又或時法皇
上人に勅問有て衆生久しく
流転せし生死の海をいかゝして
離別せむや上人答奏して曰

一(第十六紙)

抑弥陀超世の嘉名をのゝしり
諸仏超世の利益と申事も
行者の識心にかかはらず但妄
六識の当位を其まゝ置ながら

煩惱の厚薄に心をかけず妄念の
起不起を論せず只南無阿弥
陀仏と唱ふれば一念十念の
輩悉九品の間に託生する事を
得といへり此利益諸仏にこえ
諸教にすぐるゝかゆへに弥陀ひと
り我建超世願と自称し給ひ
一家も又諸教不共の利生を
なすとは申也其時結ひたまへる

一(第十七紙)

頌曰
聖道難行為有望 三業欲体住悪心
淨土易往有使生 称名仏果得往生
又同
三心具足後 蒙光触攝取
安心治定者 唱最後念佛

一(第十八紙)
絵 第四段

法皇此度上人の教化により易
往の念佛を感得したやすく
生死を出過して涅槃を成就
せん事朕か幸也殊に以前熊野
の靈夢をおほしめし合せら
れて歎喜のあまりに神書には
勅符をくたし給ひぬ崩御の
折からにも尊影并勅衣を金蓮寺
におさめ恒例の別行に

—(第十九紙)

—(第二十一紙)

道場に出し結縁し奉るへし
との遺勅なり女院も又かくの
ことし故に公卿殿上人に至る
まで冠をかたふけ掌を合せて
上人を禪仰せしむ昨日は如来の
滅後にむまれし事をうらみけふは
上人の教化により弥陀引摶の
悲願にあひたてまつることを
よろこひ今までのあたり如此の
勝利を見る争か信心を発
さらむや仍彼上人の行状を
あらはす偏報恩を謝せんかためな
り

—(第二十紙)

又熊野新宮にして神伝の一
卷の血脉を奏したまへは
一

絵
第五段

—(第二十三紙)